

三密瑜伽の実践 『快気』

〜真言密教 真実と基礎 下巻〜

著者 北本 聖明



まえがき

上巻では、在家の方々が真言宗の基本的思考を日頃の実践に取り入れていただけるよう述べさせていただきました。まずは『自利』。自身の安定と安心があり、そこから『利他』を考えるのは自然の流れです。しかし本来は『利他』のための『自利』の重要性を一層理解しておかなければなりません。今回は上巻を十分に熟知実践する心構えがあり『利他』行を邁進する意思のある方に向け本書を書き留めました。密教僧だけではなく自ら供養をしたいと考える方にも是非読んでいただけると幸いに思います。

しかしながら、心が完成しておられない方が供養行を希望されることは大変難しいことと思われれます。私の思うところ供養ができる方には資質や素質がなければそれを行うことはできないと思っております。本書をお読みになり、自身がどのような状況にあるのかを把握され自身ができる供養を実践していただければ幸いです。

第一章 真言密教を實踐できる者 p 7

◎ 体制の確立 p 8

◎ 尺度 p 8

第二章 真言密教 p 11

一、快気循環と真言密教 p 12

二、快気循環と三密加持 p 13

三、魂の柱を基本とし快気の輪を作ることとは、金剛界曼荼羅の教え p 15

四、快気循環の『共鳴↓同調↓波及』は、胎蔵界曼荼羅の教え p 18

五、快気循環の流れの完成は三摩地(さんまじ) p 21

密教と快気循環法 共通点のまとめ p 23

金剛界曼荼羅 p 24

胎蔵界曼荼羅 p 25

第三章 実践 p27

快気循環の実践 p28

一、準備 p28

二、実践 p29

三、誓願 p30

第四章 供養 p34

供養 p35

一、自身を供養する p35

二、供養をし合う p36

三、魔を供養する p38

第五章 影響

一、業という影響 p41

二、不共業と共業 p 42

三、業を供養する p 42

四、影響力に大切な、人と環境 p 44

五、正しい影響力を与える加持の力『氣』 p 44

第六章 覚醒 p 47

第七章 純聖寺の供養の方法 p 55

供養の方法 利他行の実践 p 56

護摩供養に参加する p 57

供養会に参加する p 59

在家僧侶となり供養する p 60

北本聖明の加持祈祷 p 61

感想
p63

第一章 真言密教を實踐できる者

体制の確立

前書で説明したように『魂の柱』が太ければ安定感があり、細ければ安定感がありません。

恨み、妬み、嫉み、ひがみ、嫉妬、勝手、傲慢、また虚栄心、自尊心それらがあるなら『今、あなたは幸せですか?』という質問にお答えが『はい』と即決できないはずです。つまり、利他行を行うことはこの時点ではできないとお考えいただいた方が良いでしょう。

尺度

密教僧の中にもそのような方はいらつしやると思います。もう一度基本に立ち返り、前書の実践を確認し在り方を見直すことが必要ではないかと思えます。私の寺院では僧侶の育成も行っております。しかし、まえがきでも述べましたが、『利他行』には資質と素質がなければなりません。僧侶の方に例えて申すならそれは作法の覚えが良い悪いではありません。前書の実践をして一年以上経ってもその悪心が全く消えないのであれば『利他行』をする者としては向いていないとお考えください。そのような

方は、自身が供養するのではなくお寺や僧侶に供養を委ねることが一番の選択肢であると思います。特にこの本の『供養』の章から先をしつかりお読みいただき自身ができる実践をこなすことが一番良いかと思えます。また、このようなことが密教僧であるのなら厭しいようですが、その資格はないと言わざるを得ません。密教僧という仮面をかぶり自身の影響を他人に及ぼすことは大きな罪です。舞台から降りることを希望します。

前書で述べた通り『快気』という言葉で表した大日如来との繋がりは目に見えて測ることはできません。したがって密教僧の良し悪しを判断する尺度は、名だたる名門をくぐったか、または厭しい修行をこなしたか、作法が非常にうまくできているか、つまり、車に例えると車であると人が判断するのは車という形だけで、良し悪しは『メーカーや見た目』での判断になります。真言密教僧も世間一般に同じであろうと思います。しかし、車に積んであるエンジンが大きければ走行にも安定感が生まれる。でも小さければ走行時の安定感は欠けてしまいます。このエンジンの大ききこそが、『魂の柱』です。『快気』という大日如来との繋がりを深く持っている僧侶は『魂の柱』は太く、そうでない僧侶の『魂の柱』は細い。つまり、『魂の柱』が太い正当な密教

僧であるなら三密瑜伽の実践を当然日常からこなせているため、心に大きな汚点はな
いと私は思っています。

そして、真言密教僧の中にも判断する尺度を間違えておられる方が多いのではない
かと感じます。私は三密瑜伽の体制がなされてない密教僧の歪んだ集団統制はあまり
関心致しません。『伝統仏教』と託けながら三密瑜伽という基本的概念の実践を常日
頃から疎かにし名声だけを前面に出されている現状があるという事実を衆生にもご
理解していただき、聖行派とする当寺院の方向性を純粹な真言密教実践道場であると
認識して頂ければ幸いに思います。つまり、これから述べる常日頃の実践というもの
は大変難しいものではなく、私が提唱する『快気循環』は真言密教そのものであると
いうことをこれより説明させていただきたいと思えます。

第二章 真言密教

一、快気循環と真言密教

真言密教とは自身の中にある隠された素質、つまり秘密となっている自身の素質を開花させ、この世での自身の役割を如何なく発揮し、それにとまなう衆生の感謝の意を喜びとして受け、自身の幸せと安心を実感しながら、この世で人間成長を成し遂げられる教えであるとも思っています。

真言密教の教えを仏教離れしたこの時代に理論から教授すること、またそれを教授される者が理解することは大変困難なことだと思います。しかし、快気循環法は真言密教を全て理解しなくても実践できる方法であると私は思っています。

真言密教の究極は生きながらにして仏になる。仏(宇宙)と一体となる『即身成仏』です。快気循環法も自然のパワー(宇宙)を自身に取り入れ快気を循環させる方法まさに密教の『即身成仏』と同じ原理です。快気循環法の実践が真言密教という深い教えの実践と重なっていることをこれから説明させていただこうと思います。ただし、ここでは快気循環法を中心として表現する関係上、真言密教に関する詳細な内容や説明は控えめに致します。どうぞ感覚でとらえて頂ければ幸いです。

二、快気循環と三密加持

真言密教には三密加持というものがあります。

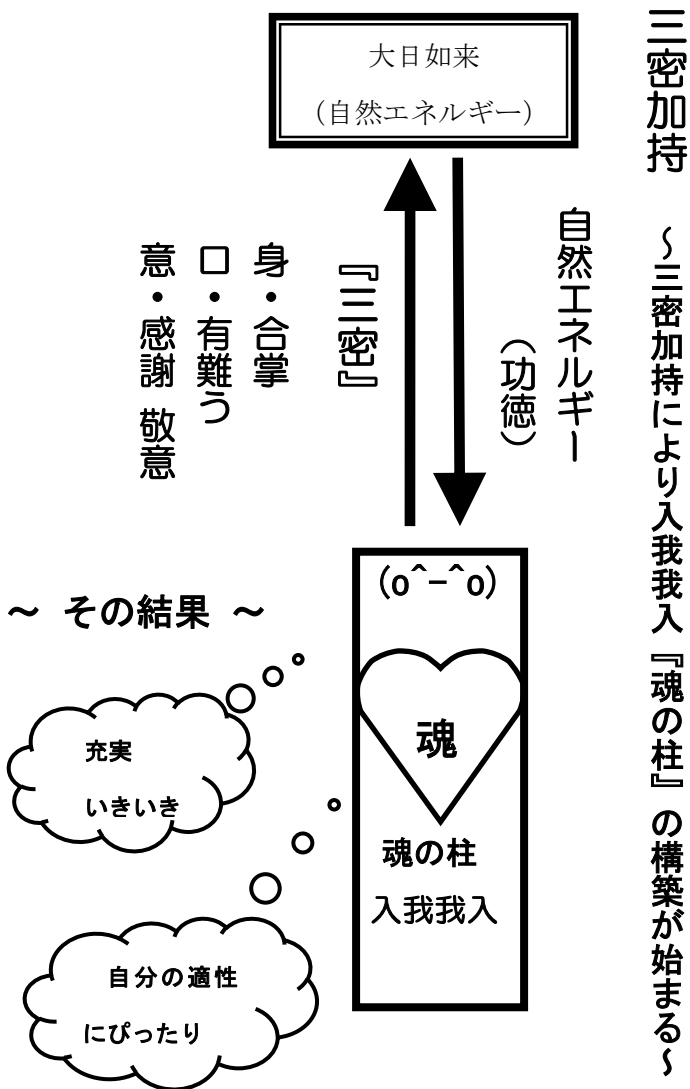
三密とは、身・口・意と言いますが、『身』手に印を結び、『口』口で真言を唱え、『意』心に仏様を想い観想をし、自身が今、仏様と一体となり仏様の大きい力を自身の中に引き寄せる方法です。加持とは、加え、持つ、と書くように仏様を自身の中に補うことです。つまり、三密加持とは三密を行うことにより『入我我入』仏様と自身が一体となり、仏心の境地を得る方法です。

快気循環法でも自然（真言密教では仏様、大日如来）からお力をいただきそのお力をいただくことにより快気循環法の基本になる『魂の柱』を構築します。「魂の柱」

の源は心の充実です。人は自然界のありとあらゆる万物の影響を受けて自身を形成し、自分らしく生きて行こうとします。快気循環法は自分らしく生きるために自然への

『感謝』を重んじています。そうすれば自然に手を合わせ、頭こぶしを垂れ、有難うと言い、

感謝する思いを抱くこと。これはまさに真言密教の身・口・意です。つまり、快気循環の基本を実践することは三密加持を実践していることと同様なのです。



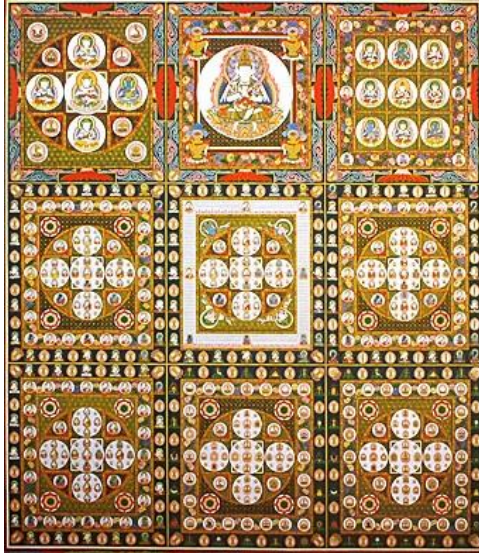
本来の自分自身（適性）を見つけることができる。それが魂の柱となる。

三、魂の柱を基本とし快気の輪を作ることは、金剛界曼荼羅の教え

真言密教に欠かせないものとして曼荼羅があります。簡単に説明すると曼荼羅は真言密教の法則（教え）を、仏様を繊細に描くことにより表した相図です。その中央に描かれている仏様こそが真言密教の中心仏、ご本尊である大日如来です。大日如来は全ての仏様の中心であり、その周りの仏様は全て大日如来の化身仏を表します。

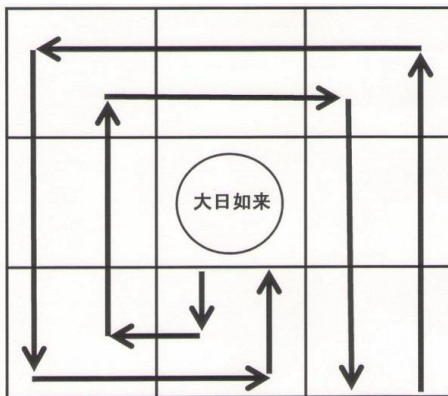
真言密教の曼荼羅には二種類の曼荼羅が存在します。そのひとつに金剛界曼荼羅があります。金剛界曼荼羅は何を表しているかと言うと『仏の智慧』を表しています。『智慧』とは、自分自身が『生きる力』を知り、それをどう成長させ反映させて行けばよいのかを説いている仏の功德です。つまり、それを簡単に示したのが快気循環法の『快気の輪を作ること』です。三密行をして入我我入することは自身が大日如来と一体になることと言えます。真言密教では大日如来は『太陽』や『宇宙』としてたとえられています。つまり『自然エネルギー』そのものなのです。それを取り入れて快気の柱を作りその柱を大きくするということは、大日如来の影響により『生きる力』を知る。『智慧』を頂くことと同様です。そして、その力を輪にすることこそが成長による反映と言えるでしょう。金剛界の教えの中に向上門と向下門というものがあり

金剛界曼荼羅

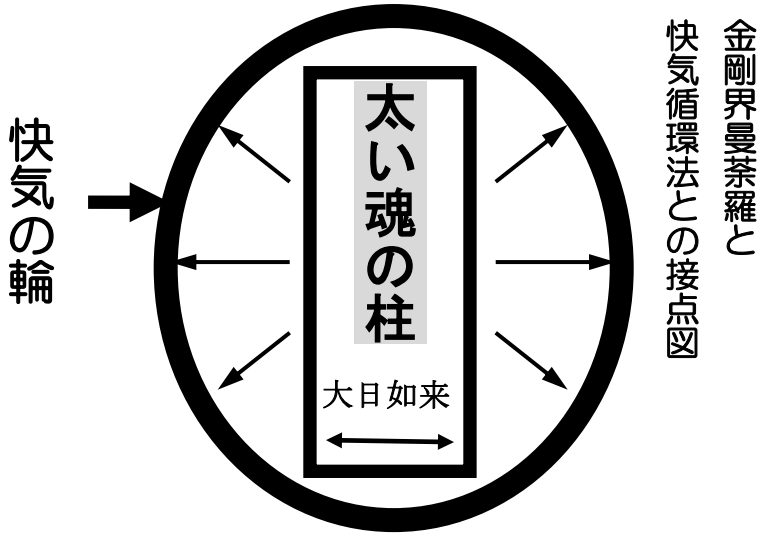


大日如来に向かっている(向上門)

大日如来から発信している(向下門)



ます。向上門は、悟りを求め大日如来に近づいて行き教えを乞う過程。向下門は大日如来が智慧の教えを衆生に反映させる過程を表します。このことから魂の柱を基本とし快気の輪を作ること、金剛界曼荼羅の教えそのものであると言えます。



『向上門』

悟りを求め大日如来に近づいて行き教えを乞う過程。

『魂の柱の構築』 快気増幅

自然（神仏）の力の中で生かされていることを意識し安心、感謝する。

（太い魂の柱（大日如来）の中の矢印）

『向下門』

大日如来が智慧の教えを衆生に反映させる過程。

『快気の輪』 快気発動 邪気に対するシールド（防御）

自身に秘められた神仏の偉大な力を発揮し始める。

（太い魂の柱（大日如来）から快気の輪に向かっている矢印）

四、快気循環の『共鳴→同調→波及』は、胎蔵界曼荼羅の教え

真言密教には金剛界曼荼羅ともうひとつ胎蔵界曼荼羅があります。胎蔵界曼荼羅は何を表しているかと言うと『仏の慈悲』を表しています。

真言密教には『菩提心を因とし、大悲を根となし、方便を究竟となす』という三句の門と言う大切な教えがあります。人はもともと母胎の中の胎児の時には純粹無垢である。つまり、『仏性』を兼ね備えた存在であると説いています。胎蔵界曼荼羅は大日如来の『慈悲』の力により自身の仏性を覚醒し『菩提心』を起こさせる。そして『大悲』を成長させ、やがてそこから波及したエネルギーが衆生に向けた慈悲のエネルギー『方便』となることを表しています。また、このことを壮大視すると中心仏である大日如来の『慈悲』の力は、この世界のさまざまな生命に対して苦しみを取り除き幸せを与える影響を表しているとも言えます。

また、中心仏である大日如来から広がる仏様は大日如来の化身仏とされ、大日如来がこの世の隅々まで形を変えながらも『慈悲』を波及し、それに化身仏が『共鳴』し、大日如来と『同調』する。分かりやすくこの理を例えるなら電球のワット数が大きいほど灯りが隅々まで届き、明るくなることと同様です。つまり、快気循環法で言えば

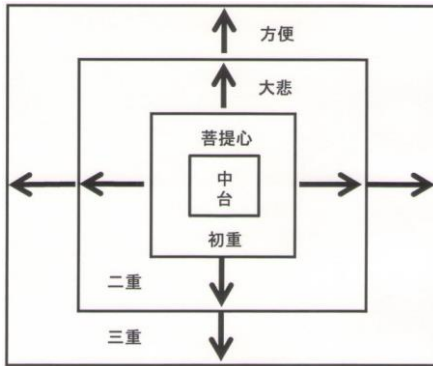
胎藏界曼荼羅



三句の門

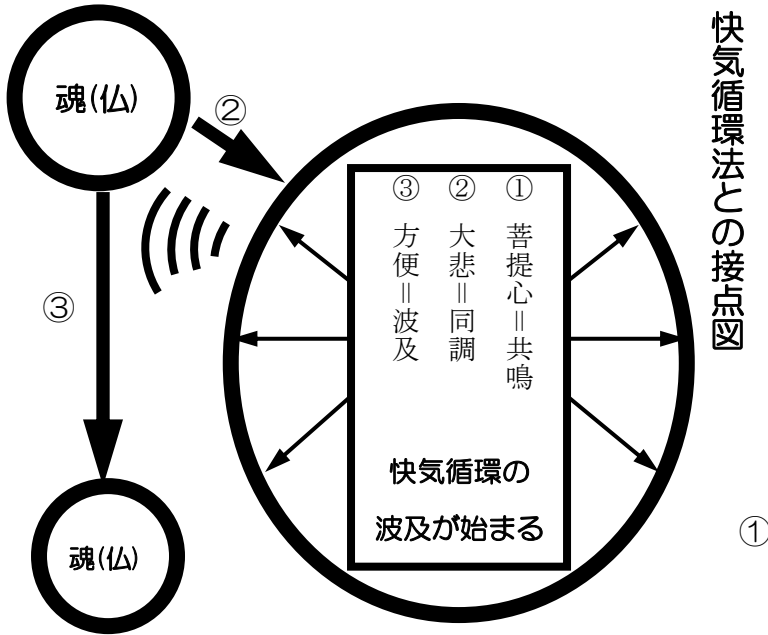
菩提心を因とし、大悲を根となし、方便を究竟となす

◎ 中台の真ん中は 大日如来



成長し、快気の輪となった自身が自然（大日如来）のエネルギーに『共鳴』し『同調』し『波及』を始める行程です。そして、さまざまな物にその波動は強く広がって行きます。快気循環法は、まさに胎藏界曼荼羅と同様の現象を起こすことができるのです。

胎藏界曼荼羅と
快気循環法との接点図



三句の門

『菩提心を因とし、大悲を根となし、方便を究竟となす』

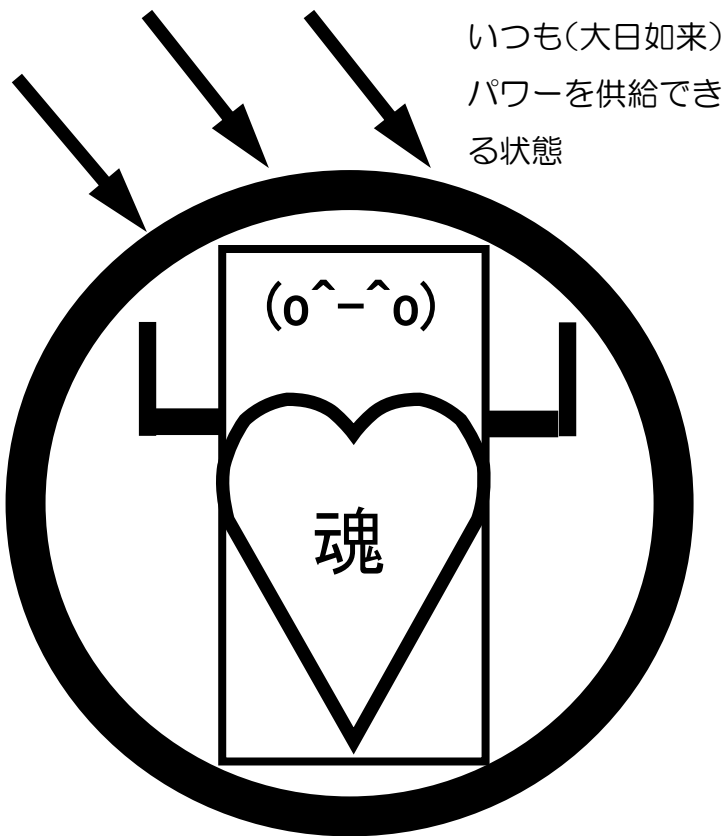
快気循環の『共鳴』『同調』『波及』

- ① **共鳴** 大日如来との共鳴により **菩提心** を発起
- ② **同調** 大日如来の慈悲意志と同調 **大悲** を成長させる
- ③ **波及** 大日如来の智慧が **方便** として波及に導かれる

五、快気循環の流れの完成は三摩地(さんまじ)

真言宗は特に身体を使った修行を重視します。手に印を組み、仏様を表す真言を何千回も読むことがあります。これを行うことにより、仏に集中することができ深い『没我状態』に至ります。これを三摩地(さんまじ)と真言密教では言います。この状態になることで仏と対話できる。つまり即身成仏に達する始まりです。いつも仏と相對する状態ということです。

快気循環法も真言密教と同じように常日頃からの快気循環の心構えと実践により高次元状態となりいつでも自然パワーが供給できる状態に到れるのです。この状態が完成すれば快気循環も完成します。



三摩地 (さんまじ)

仏に心が集中した『没我状態』

大日如来のパワーがいつでも供給できる境地、快気循環の完成

密教と快気循環法 共通点のまとめ

三密加持

神仏（森羅万象）の存在を改めて認識し受け入れる。（身・口・意）

快気覚醒

万物（森羅万象）の影響を受けて自身が形成されていることを知り、自分にぴったりに合っていることを見つけて心の充実を計り、自身に眠る可能性に気づく。（合掌・ありがとう・感謝の意）

金剛界曼荼羅

向上門

悟りを求め大日如来に近づいて行き教えを乞う過程。

魂の柱の構築 快気増幅

自然（神仏）の力の中で生かされていることを理解、意識し安心、感謝する。

向下門

大日如来が智慧の教えを衆生に反映させる過程。

快気の輪 快気発動

自身に秘められた神仏の偉大な力を發揮し始める。

胎藏界曼荼羅

三句の門

『菩提心を因とし、大悲を根となし、方便を究竟となす』

快気循環の『共鳴』

大日如来との共鳴により菩提心を発起

快気循環の『同調』

大日如来の慈悲意志と同調大悲を成長させる

快気循環の『波及』

大日如来の智恵が方便として波及に導かれる

三摩地（さんまじ）

仏に心が集中した『没我状態』

自然エネルギーがいつでも供給できる境地、快気循環の完成

第三章 实践

快気循環の実践

私は、長年の経験により宇宙の存在が私の細胞にどのような力を与えて頂けるかということを感覚で覚えることが出来ました。しかしながら、これは大変に難しいことだと思えますので、はじめて快気循環を始める方にも日頃からわかりやすく実践できるように私が実践してきたことを一般向けにアレンジして作ってみましたのでどうぞ実践にご活用いただければ幸いです。

一、準備

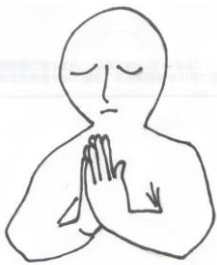
まず、基本は正座もしくは半跏座（またはあぐらのようなかっこうで結構です）で座ります。しかし足が悪いまたは、そのような状態が苦手な人は椅子に座っていただいても結構です。できるだけ長時間座れるくらいゆったりとリラックスできる状態にしてください。

次に呼吸を調えます。密教では阿息観などを行いますが、わかりやすくここでは三

回から七回深呼吸を行います。大きく息を吸います。吐くときはできるだけ長くゆっくり吐きます。吸うよりも吐くことに意識を集中してください。ゆっくりゆったりと行うことができれば気分が随分と落ち着いてくるはずですよ。準備が出来ましたらいよいよ実践です。

二、実践

まず手を合わせます。手を合わせ合掌(身)次に口に出して『お蔭さまです』または、『アピラウンケン』と三回唱えます(口)次に誓願(意)を唱えます。誓願はこの後に記載していますのでそちらをご覧ください。



三、誓願

これより大いなる宇宙原理のお力をお借りするために誓願致します。
今ここにいる私たちは宇宙の偉大な原理により生かされています。

この生命活動には意味があると認識します。

宇宙により作られた万物の連鎖よって私たちの活動は成り立っています。

その宇宙の真理により、私たちは肉体と精神を維持し、

人間界の活動を通じて魂の成長を促されています。

そのことに感謝申し上げます。

そして、宇宙の真理は私たち一人一人が正常に活動することにより

私たちの魂に『幸せ』という『安心』を与えて下さいます。

しかし、我欲に走ればその教えは途絶ええると思っております。

むさぼる心を持たない

自欲のことで怒らない

不平や愚痴をこぼさない

自分だけ良ければいい、目先の利得に心が奪われる。

小さくても邪心があるなら、合掌をして懺悔致します。

宇宙の真理は自我欲のような小さな満足ではなく

もっと温かく、豊かで充実感と安心を与えてくださいます。

そして肉体から魂が離れる時が来てもその活動は永遠に続くことでしょう。

そのような偉大な力を

素直に心を開くことで、どうぞお授け下さい。

今、ここに生かされていることを真に感謝致します。

そして頂いた波動を、この人間界で正しく使い、

世に正しく影響を与える存在になることをお誓い申し上げます。

また、前述しましたように快気循環法は密教と共通する部分があります。密教では手に印を組む身密、真言を唱える口密、仏を感じる観想の意密を意識して行う三密観という方法を行います。密教の修法は密教僧にならなければ実践できませんし、さまざまな意味で大変奥が深く難しいものです。しかし、快気循環法はどなたでも実践できるように考案してありますので気軽に実践していただきたいと思えます。

これを行うことにより、仏に集中することができ深い『没我状態』に至ります。これを三摩地（さんまじ）と真言密教では言います。この状態になることで仏と対話できる。つまり即身成仏に達する始まりです。いつも仏と相對する状態ということ。快気循環法も真言密教と同じように常日頃からの快気循環の心構えと実践により高次元状態となりいつでも自然パワーが供給できる状態に到れるのです。この状態が完成すれば快気循環も完成します。



第四章 供養

供養

供養とは亡くなった方にお供え物をして冥福を祈ることが一般的な供養のイメージであるが、仏さまを供養するというように香、華、燈明、飲食などを備えて真心を捧げるという意味もあります。つまり、**供養とは『尊敬と敬意』の形『感謝』である**と言えます。そう考えると人間生活は供養そのものであるとも言えます。

一、自身を供養する

我々はこの世での修行のためありがたくこの肉体をお借りしています。自身を大切にし『尊敬と敬意』を持って生活を送らねばなりません。また、この肉体は数え切れぬほどの先祖が融合し自身となっています。まさに自身はご先祖そのものであります。したがって、自身を大切にすることは先祖供養であり『自利』を行うことは供養そのものであると言えます。

二、供養をし合う

真言密教の教えには仏としての正しいつぼみを開花させ、自身がこの世での色を輝かせる『自利』の教えもあります。その『自利』の行いはやがて自然や周りの人々に影響を与えはじめ『利他』となる。これは曼荼羅に示されている理です。

正しい人間は『尊敬と敬意』に溢れます。この人と人、人と自然（仏）が互いに尊敬すること。この供養の仕合を『相互供養』と言います。この『相互供養』は曼荼羅にも示されています。

つまり、快気循環で『自利』の強化である『魂の柱』を太くしていくことこそが全ての供養に繋がっていることを理解していただきたいと思えます。

快気循環のはじまりは『自利』の強化、『魂の柱』を太くしていく」と。

仏心に目覚め、自身を高める。自身を確立する。自立するなど。

自利の確立

利他行となり供養となる

自身は先祖そのもの。
自身のオーラは他者に影響を与える



三、魔を供養する

智泉大徳がお亡くなりになられたとき『阿字の子が阿字のふるさと立ちいでて、また立ちかえる阿字のふるさと』と大師はお言葉を残されました。阿字とは大日如来です。私たちは大日如来より生まれ肉体と魂を統一させこの世に出でましたが、修行を終えまた肉体と魂を分離して阿字である大日如来のもとへ戻るといふ意味です。

大師は同時に『色心不二』と示され肉体と魂は一体であると申されました。『自利』の確立により『魂の柱』が太くなることは太陽、つまり大日如来のように強く光り輝いているのと同じです。もし、周りに『快気不循環』な人がいると『確立できていない魂』が不の影響『魔』をオーラとして放つことがあります。そのとき『氣の世界』へ発せられた『魔』は『現実の世界』との狭間を行き来します。それは肉体と魂に影響をもたらします。しかしこのときに『自利の確立』が完成しているとすれば、太陽のようにその魔を溶かすことができ、同時にその魂も『阿の世界』に帰すことができます。つまり『魔を供養する』ことができるのです。同様に不成仏のエネルギーも同じと考えます。

『阿の世界』

つまり、心（魂）の世界
（浄土）

大日如来

不のエネルギー

恨み、妬み、嫉み、
ひがみ、嫉妬、勝手、
傲慢、虚栄心、自尊心

不成仏の
エネルギー

『気の世界』
即身成仏

確立できていない魂

自利が確立し太陽となれば
魔の影響を受けても魔を溶
かすことができる。
それが『供養』となる

自身

自利の確立により
自身が太陽となる

『現実の世界』

供養をまとめますとこのようになります。

- ① 自身を供養することで自身を高め、それが先祖を供養し家門繁栄に繋がる。
- ② 供養されている自身がオーラを放つことにより物質的な相互供養がはじまる。
- ③ さらに供養を進めると精神的供養がはじまり供養循環が促進される。

このような供養の順序を見て行きますと自身の在り方『自利』のはじまりが如何に大切かということが理解できます。

また、自身が存在することによる影響というものは必ず周りに起こっているという認識を持つことは非常に大切な事柄であり、その影響をよからぬマイナスとして放つことをさげなければなりません。そのことは『業』として、しいては自身に返ってくることでもあるからです。

第五章 影響

一、業という影響

人は存在する以上影響力があります。つまり、自利の確立から相互供養と移り変わることはよい影響を与えていると言えます。しかし、自利が確立しない場合その影響はマイナス影響の流れを作って行きます。それを仏教では『悪業』と言います。悪を除いた言葉で『業』という言葉があります。『業』（ごう）とは、人の行為〓この世での人間の行いです。そんな「業」と言う言葉を使った分かりやすい言葉に「自業自得」があります。自分の行いの報いを自分で受けることです。他人に心から親切にしていればその行いは必ず帰ってくるものです。

二、不共業と共業

人は誰もがこの世を幸せに生きて行きたいと思っっているはずですが、そのために努力を惜しまず一生懸命に頑張っている人々ばかりです。しかしながら、世の中のすべての人が努力だけで報われているかと言えれば決してそうではありません。そこには運・不運が関わっています。運の良い人、悪い人、何故、人により運・不運が起こってしまうのか。仏教では、その原因は『業』いわゆる『常日頃の行い』によるも

のであると考えます。

「意に沿わない」そんな心(意)が生じたとき葛藤や不快な思いを抱いてしまします。しかし、このことがあまりに強く出てしまうと**発言(口)**や**行動(身)**に悪い影響を及ぼします。つまり仏教で言う、貪り(むさぼり)怒り、痴さ(おろかさ)の三毒です。それにおかされた人間は悪業を重ねやすいと言われます。そして、この個人として作る業を「**不共業**」(ふぐうごう)と言います。

また、その時代の人が要求して作っている物の「業」というものもあります。この世の中はパソコンなどが普及しインターネットの急速な発達により、さまざまな部分で生活効率が向上しました。

しかし、その反面それを正しく使いこなせない若年層のトラブルや事件も多発しています。この「業」は自身とは関係ないものでは決してありません。人間が便利を追求し自然を破壊し、公害に巻き込まれること、これも苦しまねばならない「業」と言えます。このように気づかず共に作ってしまった「業」を**共業**(ぐうごう)と言います。

三、業を供養する

業を考えると人の存在自体が良くも悪くも『業』を生むことになります。個人で作る『不共業』は自身の日頃の精進力と努力で悪業を薄くすることはできても『共業』に関しては社会に依存している関係上その業はどうしても背負わねばなりません。したがって業を完全になくすることはできません。しかし、『現実の世界』で自身が『自利』を確立し『阿の世界』つまり大日如来の世界へ悪業を悔い改め懺悔することを行う事によりその魂は阿字に立ちかえる。つまり、できる限りリセットをすることができ。これが業の供養であります。

業の供養に必用な事は常日頃から多かれ少なかれ業を作っている自身を知り、謙虚になり心からの懺悔を怠らない事です。

四、影響力に大切な、人と環境

影響はマイナス面だけではありませんプラスの影響もあります。恨み、妬み、嫉み、ひがみ、嫉妬、勝手、傲慢、また虚栄心、自尊心などを感じる人やそのような方が多くおられる集まりには『魔』があるため避けることは当然です。しかしこのご時世、

避けることができにくい場面も多くあると思います。そのようなときはなるべく多く聖域へ身を寄せることです。そして『魔』の影響力を供養し、できる限りリセットしなければなりません。

また、聖域で正しい影響力を受けることは『自利の確立』を促進し『魂の柱』を太くしていきます。ここで聖域と言いますとお寺が代表的な場所にはなりますが、お寺が大きく立派であるから聖域であるとか、また、たくさんの方が足を運んでいるから聖域であるとかということは聖域の善し悪しの判断にはなりません。私の知る限りでも衆生の思われる場所とは全く違うところである場所がたくさん存在しています。立派なお寺で供養ができる場所があってもきつちりと供養できる人がいなければ全く意味をなしません。大切なことは三密瑜伽を基本的理念とし実践している住職が存在する寺院かどうかです。

五、正しい影響力を与える加持の力『氣』

ただ、三密瑜伽の実践を明確に立証する術はほとんどありません。しかし、『阿の世界』と『現実の世界』を通過するシグナルを明確に受信し具現化できればどうでしょう。その正しく強力な影響力は計り知れません。またそこにお集りになられる方は

言うまでもなくプラスのエネルギーに変換されていくことでしよう。

私は長年に渡る三密行によりその瑜伽の境地に至りました。曼荼羅の教えを純粹に実践しながら、自身に示された仏としての力の色を開放し、ある感覚を体得することができました。この力こそが私が三密瑜伽により与えられた加持の力『氣』なのです。

私の使命は、大日如来と衆生の架け橋として、正しく素晴らしい影響力を与えつづけること。そのような思いからこの本を書き留めているのかもしれない。

第六章 覚醒

平成三十一年二月、私は三日間木食戒とわずかな水分だけで三千枚の添え護摩木をお焚き上げする行を本堂で行っていた。そして、行に集中し護摩壇の炎を見つめていた。炎は完全に落ちた、しかし、そこに私は添え護摩木を投げ入れる。衆生の願いをこの目の前の不動明王に届けるのだとその意識の高まりより他はない。『なうまくさんまん ばざらだん せんだ まかろしやだ そわたや うん たらた かん まん』不動真言を唱え続ける。そしてその思いの意識を最大にすると、炎は再び煌々と燃え上がりはじめる。まさに念力としか言いようのない不思議な現象が幾度となく繰り返される。そこにはどのような力が加わっているのか。言うまでもなく長年の三密瑜伽行で体得し得た感覚『加持の気』以外なものでもない。この行はその力の凄さを改めて感じた瞬間でもありました。



時はさかのぼること約二十年前、身体の不調の改善を目的にとある気功の先生を訪ねたことがあります。数回通わせていただきましたが、全身に気を通された最初の感覚は今でも覚えております。全身に見えない何か温かいものがゆっくり入ってくる感覚、人からこのような不思議な力が出ているのか大変驚きました。体調の方はおかげさまで少しずつ改善してまいりました。そのようなこともあり東洋医学の気学を学び始めたのです。

真言密教僧は五明が大切であると言います。『仏法五明』とも言われ声明（言語学）

内明（心理学） 因明（論理学） 医方明（医学）いほうみょう 工巧明（工芸学）くぎょうみょう を学ばなければな

らないとされています。弘法大師は書の達人であり、人倫の道を説き、密教に優れ、当時の薬学にも触れ、仏師でもありまた満濃池を改修された。密教僧とはまさに人格者でなければならぬ。特に当時の医学の基礎は『祈り』が主体であり、まさに加持祈祷が当時の医学そのものであったということは言うまでもない。しかし、この時代にその効果たるものが無であるならばそこに加持祈祷というものは存在すらしなかったはずである。また、西洋医学が発達したこの時代においてもよくなる病気が

東洋医学の力でよくなる現実があります。その基盤こそがまさに気学であり加持祈祷であると私は確信しています。

『氣』を学ぶ為には『氣』を受ける。これが気学の最初であります。『氣を受ける』つまり、『氣を知る』ということです。学びは氣を身体に通され次は氣を発動する動作と呼吸そして氣が身体を行き来するイメージをします。私は真言密教僧としての経験からこの流れが『大日如来からの影響（シグナル）を受け、身（動作） 口（呼吸）意（イメージ）』三密であることを認識致しました。そのようなことを考えると私にとって気学そのものが三密瑜伽の実践であり、その実践により『利他』に生きることができるようになったと畏れながら自負しております。

気学を学びはじめて程なく、『三昧地』への感覚が研ぎ澄まされ『利他』の行に必要な洞察力と直観性に拍車がかかりはじめました。また同時に氣の具現化である外氣功が行えるようになりました。決して簡単にはこの境地に達することはできません。私が短時間で氣を具現化できたのは密教における基本的なベースが極自然に行っていた『日常』があったからに他なりません。お大師さまが若かりし頃、全てをなげうって山岳修行に没頭していた時期がありました。しかし、そんなお大師さまは後に恵

果阿闍梨より唯一密教の真髓を伝授されこの日本の仏教の石柱をお作りになられた。つまり、その自然（大日如来）との融合を探求していた時間が密教僧空海としての基礎を作ったことに間違いないと言えるでしょう。畏れながらも大師さまと比較するのは分不相応ではございますが自然との融合における『三昧地』への感謝の思いはあるときを境に常に強く持ち続け、何事も日々精進を繰り返してきたことは真実ではございます。そのおかげをいただき今私は『大日如来』より賜った私の色を覚醒し『利他』という影響を発しているのだと思っております。

平成二十年頃より本格的に『加持』として衆生に施して今で約十数年が経ちます。『加持』をはじめますと受ける側は身体が自然に揺れはじめ、身体が温かくなり、腸が活発に動き出し、自然と涙が流れ出す。人それぞれではありますが目に見えてこのような反応をする方がほとんどです。癌の既往がある方なども来寺されます。いつもホットフラッシュに悩まされておられますが加持を行うとしばらくはないそうです。他、腰痛や心理面の不安でお越しになれたりしますがそれも加持後は良好と聞きます。

これからも私の精進は尽きませんが、現代人は人である根源を逸脱し、自身のエゴで納得できない見解は全て『迷信』と置き換え論外にします。財団法人和敬塾常務理事の奥平明観、著『邪気論』でも述べられていますが『気という実体がいつしか見えなくなり、気は中身の無い言葉となった。それを埋め合わせるものとして、電気・磁気・神経などに置き換えられ、邪気においては眩惑され迷信の類となった』と記載されています。では人はどのように形成されている存在なのだろうか。『気』を無視



して人は語れるのだろうか。人と人は感じ合いその中でコミュニケーションを諮り人間社会を構築して行きます。そこには目に見えて物理的な形だけでは決して構築できない目に映らない何かの影響を多大に受け人は存在しています。そしてこの世の中の人の大半はそれを知っていながらそれに向き合うことを避けているように思えます。人はもう少し謙虚にまた、何故今、自身がここに存在しているのかということに対して素直に向き合わなければならぬのではないのでしょうか。そうすればもつとこの可能性を秘めた力が真に発揮されることであろうと思っています。

私は真言密教僧として『大日如来のシグナル』を常に発することを精進しております。受ける側が正しく受信できるのであればきっと私の発する影響は受ける側にとってより素晴らしい変革と覚醒に繋がることと思います。『利他』の覚醒の為の大きな影響を大日如来より賜りより多く発して行く、これこそが私の使命であると思っています。

※ 『北本聖明 加持祈祷』と検索。お加持動画を見ることが出来ます。

第七章 純聖寺の供養の方法

供養の方法 利他行の実践

供養それはまさに『利他』の実践であります。聖域として純聖寺が行っている供養をご紹介させていただきます。

また、純聖寺では、さまざまなお立場から供養に参加できるような仕組みを作っております。ご自身のスタイルにあった『利他』を実践し供養をされ、仏の智慧に触れることにより自身と関わる全ての人々に『安心立命』という気づきをお与えいただけます。幸いです。

護摩供養に参加する

純聖寺では第三日曜日の定例護摩、毎月二十八日の不動明王の縁日の護摩を修しております。護摩は真言密教では欠かせない最大の供養方法です。火を焚くことよつて不動明王に祈りを伝え、願いを成就させる真言密教の特別な修法です。起こす炎に護摩木を投じて護摩木を燃やし、その煙が天高く阿の世界に上がることで願いが通じると言われるものです。

また、護摩は教令輪神（きょうりょうりんじん）である不動明王に修するものであり、魔を払いのける力、厄除け、災難消除のご利益が非常に強いとも言われています。不動明王は大日如来の化身とも言われます。その炎の力は大日如来の太陽の力と同じ、全てを溶かし清浄にすることから**唯一、『業』を滅すことができる方法**とされています。護摩はさまざまな寺院で修されています。しかしながらこれまで述べてきたとおり三密瑜伽を実践できる密教僧が行う行法とそうでない僧侶が行う行法とはまるで行っていることが別物であることをご理解頂ければと思います。



北本聖明 不動一段尽護摩修法

とき

毎月第三日曜日 午前10時～ 午後14時～（二回）

毎月二十八日 午前4時半～

護摩木購入により参拝可 護摩木三百円

※時々変更あり（予約制）

※遠方によりご参加不可能な方は対処方法あり、
詳細は純聖寺ホームページにて

供養会に参加する

純聖寺では毎月二十一日に供養読経会を行っております。聖域である寺院にて読経を行うことは『快気の輪』が大きくなり、よい快気に包まれ供養が促進される行事でもあります。よい影響を受け感化され人間生活において充実を計るとともに『自力』による『利他』、『利他』による『自力』を参加者と共有し精進に邁進することのできる会です。最後には住職の説法（お話）があります。

とき

毎月二十一日 午前10時より 一時間程度 ※ときどき変更あり

お布施 三千円

※ 当山僧侶、在家得度者は年間寺布施一万円納寺の為、お布施はいただきません。

在家僧侶となり供養する

純聖寺では僧侶養成も行っておりますが、在家僧侶者も受け入れております。正式な意味とは逸脱するかもしれませんが、在家とは世俗を離れない者、得度とは仏に仕える者になるという意味です。本来、在家僧侶という言葉は仏教ではタブーかもしれませんが。しかし、世の中は常に変化します。正僧ではないがそれに近い存在として真言密教を世の中に広めよい影響を与えたいということはとても大切なことであると思えます。お大師さまも広く衆生に教育をしようとしていたように、自身ができる真言密教を行うことはこれから必要であると思っております。

入門 随時 **費用** 十五万円 **内容** 護身法伝授。実践講座（供養の方法など）5回講座。『戒名授与』『在家僧侶』認定書授与。他、供養会への無料参加。寺院にて定期的な年間個別供養。**在家僧侶を目指す方はこのような方が受講されます。**自己啓発や悩みの払拭など。簡単な祈祷や供養がしたい。自身祈祷。家族祈祷。先祖供養。水子供養（他家の供養はお控えください）物質の供養（写真など）

北本聖明の加持祈祷

大日如来（宇宙・太陽）は今の私たちを作り上げた創造者であります。つまり『私たちが何故生かされているのか』この意味を知り、そして、その疑問に教授していただけるのは創造者である大日如来のみである。私はそう思っております。真言密教僧侶とは、そんな偉大なる仏の声を衆生に届ける架け橋であると思っております。そして、真言密教には仏の偉大なる力を衆生に届け衆生済度、靈徳を体得させる。特殊な修法があります。これが加持祈祷です。

『現身に成仏して仏の靈徳を体得する。仏力によって衆生を済度する』

何度も申しますが、浅く密教を極め芸の如く炎を燃やしあたかもそれらしく仏を祀り、私腹を肥やそうと企てる。そのような寺院を私は残念ながら知っています。そんな場所が多く存在していると信じたくはないですが、三密瑜伽の実践力の違いを肌で感じてしまうのも事実です。

私はこれまで自身の能力を謙虚に思い、縁の深い方々にのみ理を与えてまいりました。しかしながらインターネットの普及により衆生が自身で確認するという努力が失

われ評価や見た目だけでの判断をされるようになり、正しいものを正しく見る力がどんどんと失われているように思います。そして、その誤認によりまんまと悪の企てに引っ掛かってしまうのだと思います。そのような方々を見て私はこの世の危機感を感じざるを得ませんでした。もうこれ以上純粹な衆生を餌食にしてはならない。自身の能力を謙虚に思っておりますが奮起し、自分の持てる力をもっと役立てようと思いました。本物はここにある。そう自信を持ってお役目を全うしたいと思っております。

感想 ↳北本阿闍梨に学びをいただいて 僧侶となつて

「神仏を信仰していればご利益がある」私は仏教に出会った時、初めはそう短絡的に考えていました。そのような気持ちだったのでなかなか信仰というものの本来の実践ができませんでした。北本阿闍梨と出会い、私の信仰心がいかに浅いものかを理解できました。この本には「なぜ信仰するのか」「なぜ感謝なのか」その「なぜ」ということがたくさん書いてあります。

この本をよく読み、よく内容を考え、本物の感謝を自ら追求し、自利と利他を實踐していくほど、大日如来からのシグナルをいただけるようになり、人生がどんどん良くなつていきました。「なんととしても、頑張つて生きよう」という強い求道心さえあれば、仏教知識も苦行の経験もない私でも大日如来からのシグナルをいただけると分かつたときは、飛び上がらんばかりに喜びに打ち震えました。これは三密瑜伽を体得された北本阿闍梨の偉大なる影響に他なりません。真に感謝申し上げます。

(兵庫県 自営業 32歳 K)

あとがき

人は、悩むとまず何かに頼りたくなるものです。特に真言密教という秘密の教えは一般に公表されていません。『知りたい』そう思う心から、さまざまに書物を引つ張り出しそこからヒントを得ようとする人も多いと思います。参考にすることはとてもよいことではあります。過ぎますと、書物に頼った意固地な思考になってしまいます。つまり、顕教的思考（分析する思考）となり真言密教の三密瑜伽に必要な感覚的思考が失われてしまいます。

本書を分析しようと繰り返し読み返すのではなく、できる限り目を通してみる。脳で理解するのではなく感覚で理解する。そうすればここに書かれている内容が自身にとって想像がでないぐらいのすばらしい光を放つことになるでしょう。

皆さまのご多幸を心よりお祈り申し上げます。

合掌

参考文献

空海黄金の言葉 密教の本 真言密教の本

あらすじとイラストでわかる密教

邪気論 見えない身体への一步

著者 北本 聖明（きたもと せいめい）

真言宗 姫路成田山福崎布教所 大弥山 純聖寺 住職。真言宗 聖行派 伝法大阿闍梨

【本部所在地】〒679-2203 兵庫県神崎郡福崎町南田原二〇六三ノ2

【電話】0790（22）2734



2019年3月20日 発行

